

大学における環境教育への取組み

森 田 美千代

- I はじめに
- II 調査の内容
- III 調査の過程と結果
- IV おわりに

I はじめに

二十一世紀を目前にしている現在、世界は、地球的規模で国際的規模で、さまざまな問題をかかえている。その最たるものは、生命倫理の問題、エイズの問題、環境の問題であろう。

筆者は、A大学において、キリスト教学IV（キリスト教倫理）を担当している。このコースにおいて、その一部分として、筆者は、現代の問題として、生命倫理の問題、エイズなどを含む男女の愛の問題、従軍慰安婦や働く女性などを含む女性の生き方の問題、環境の問題を、とりあげた。

本小論は、そのなかの環境の問題、特に、大学における環境教育への取組み（大学生は、環境の問題に関して、どのようなニーズをもち、どのようなことを大学教育に期待しているか。大学は、大学生のそのようなニーズと期待に対して、教育において、どのように応えていかなければならないか。）について、調査の結果やキリスト教学IV（キリスト教倫理）のコースにおける環境の問題の取り扱いをもとにして、いささかなりとも貢献することをねらいとするものである。

II 調査の内容

配布された質問紙の内容は、以下の通りである。

大学における環境教育への取組みについてのアンケート

____ 学部 ____ 専攻 ____ 学年 ____ 才 男 女

1. あなたは、高等学校の教育を終えるまでに、環境についての教育を受けたことがありますか。

は い _____

いいえ _____

2. はいと答えた人は、次のうちのいずれの学校において、主としてどのような内容の教育を受けましたか。(いくつ選んでもよい。)

幼稚園・保育所 _____

小学校 _____

中学校 _____

高等学校 _____

3. あなたは、A大学で、これまで、どのような科目で、どのような内容の環境教育を受けましたか。

科目名	科目の一部分として 全面的に	学年	内容

4. A大学で、上記の、環境問題に関する内容を、授業で学んだことは、どのような点で、役に立ちましたか。(いくつ選んでもよい。)

知識として _____

実践・実行まですすめることができた _____

その他 _____

5. 大学で (A大学に限らない)、独立した一科目として、「環境学 (仮称)」

が開講される必要があると思いますか。

開講される必要はない _____

開講される必要がある _____

6. 開講される必要があると答えた人は、どのような内容が網羅される必要があると思いますか。
7. A大学は、環境（キャンパス全体）をよくしようと配慮していると感じていますか。
配慮していると感じている _____
配慮していると感じていない _____
8. 配慮していると感じていると答えた人は、どのような点においてか、具体的に、書いてください。
9. 大学生として（小・中・高校生や社会人とちがって）、どのような点で環境をよくすることに、貢献できますか。
大学生だからということでは貢献できることはない _____
大学生として貢献できることがある _____
10. 大学生として貢献できると答えた人は、どのような貢献ができるか、具体的に、書いてください。

Ⅲ 調査の過程と結果

本小論のねらいのための方法として、筆者は、質問紙法を用いた。質問の内容は、すべて、筆者が、考えたものである。質問は10からなっている。1と2は、高等学校の教育を終えるまでに、どのような内容の環境教育を受けたかについて、3と4は、在学しているA大学で、これまで、どのような科目で、どのような内容の、環境教育を受けたかについて、5と6は、A大学に限らず、大学で、どのような内容の「環境学（仮称）」が、開講される必要があるかについて、7と8は、A大学は具体的にどのような点において、環境をよくしようと配慮しているかについて、9と10は、大学生は、小・中・高校生や社会人とちがって、具体的にどのような点において、環境をよくすることに、貢献できるかについて、である。

質問紙は、1992年7月10日に、A大学の「キリスト教学(Ⅳ)」のコースの担当者によって、そのクラスで、出席者全員の272名に、配布され、同数の

回答用紙が、そのクラスのなかで、回収された。

回答者は、男子170名、女子101名、性を記入しなかった者1名の、計272名である。回答者の学年と年齢は、大部分において、4年生の22歳である。回答者の学部は、文学部、商学部、経済学部、法学部である。

調査の結果は、以下の通りである。

1. あなたは、高等学校の教育を終えるまでに、環境についての教育を受けたことがありますか。

272名中、はいと答えた者は59名、いいえと答えた者は213名である。高等学校の教育を終えるまでに、つまり、1970年代から1980年代にかけて、環境についての教育を受けている者は、少ないことが、わかる。

2. はいと答えた人は、次のうちのいずれの学校において、主としてどういう内容の教育を受けましたか。(いくつ選んでもよい)

ここでいう幼稚園・保育所、小学校、中学校、高等学校とは、前述したように、1970年代から1980年代にかけてのそれらである。

幼稚園・保育所では、環境教育は、ほとんどおこなわれていないこと、小学校、中学校、高等学校では、ほぼ平均しておこなわれていることがわかった。

環境教育の内容は、小学校では、公害が最も多く、59名中、18名である。公害の他に、自然破壊やごみについて、教育を受けている。中学校でも、公害と森林破壊が多く、59名中、それぞれ17名、7名となっている。高等学校では、オゾン層破壊、公害、森林の伐採、大気汚染、ごみ処理などの教育を受けており、59名中、それぞれ5名、4名、4名、3名、3名となっている。これらの他にも、数は少ないが、内容としては、多種多様である。

3. あなたは、A大学で、これまで、どういう科目で、どういう内容の環境教育を受けましたか。

回答者は全員、「キリスト教学 (IV)」において、コースの一部として、環境教育を受けていることになるので、^{(1),(2)} 以下の結果は、「キリスト教学 (IV)」を除いた結果を記すことになる。

A大学で環境教育をこれまで受けたことがあると答えた者は、272名中、93名で、受けたことがないと答えた者は、179名である。

回答者のおよそ3人に1人の割合で、A大学で環境教育をこれまで受けたことになるが、環境教育の必要性が強調されるようになったのが最近のこと

であることを考慮に入れると、回答者のうちの93名がA大学で環境教育をこれまで受けたことがあることは、学生のほうにもまた大学のほうにも、環境教育に対して、かなり高い関心があるということがいえよう。

A大学でこれまでどのような科目で環境教育を受けたかについては、以下の通りである。⁹⁾ 一般教育科目と専門教育科目の両方にわたって、環境問題を扱っている科目は、膨大な数にのぼる。例えば、一般教育科目としては、経済学、社会学、人文地理学、自然地理学、物理学、化学、生物学、英語などである。専門教育科目としては、文学部における、時事英語、保育内容の研究（環境）、地域文化概論、中国事情など、商学部における、交通論、商業政策総論、外書講読、演習、経営学史、基礎演習など、経済学部における、経済地理、地域開発論、世界経済論、資源貿易論、世界経済事情、演習、外書講読、時事英語、国際経済システム論、中東経済論、環境経済学など、法学部における、国際法、基礎演習、専門演習、外書講読など、教職に関する専門教育科目における、英語科教育法である。さらに、1992年度から、環境問題という科目が新しく開講されている。

環境問題を扱っている科目は、文学部、商学部、経済学部、法学部のいずれの学部にもあるが、A大学では、経済学部において、最も多く、環境問題を扱っているといえる。

環境問題を扱っている上記諸科目のうちで、環境経済学、演習、環境問題を除いて、他の科目は、コースの一部として、環境問題がとりあげられている。

A大学では、1992年度から、環境問題という科目が新しく開講され、全面的に、環境に関する問題が学ばれていることは、全国的にも、注目されてよいといえよう。

回答者の上記諸科目の受講学年は、1学年から4学年にわたっており、偏りがない。

環境問題を扱っている上記諸科目の内容は、次の通りである。

一般教育科目としては、以下の通りである。日本の高度成長に伴う環境破壊について。森林伐採について。人間が及ぼす環境の変化と都市づくりについて。地球温暖化について。地球の自然は、どのように成立し、どのように変化してきたか、また、今後地球の自然を悪化させないためにどのようなことをするのが望ましいか。CO₂の増加やフロンガスについて。光化学スモッグ

グや酸性雨について。オゾン層破壊や公害について。大気汚染や水質汚染について。人口や食糧（料）や土壌について。発展途上国での乱開発、特に熱帯雨林の伐採について。生態系の変化について。動植物の数の減少について。ごみ問題について。

専門教育科目としては、以下の通りである。ごみ問題について。美術史（建築）からみた環境について。中国大陸の砂漠化について。酸性雨について。騒音問題について。リサイクルについて。英字新聞に出ている環境問題の記事講読。経済学からみた環境問題について。環境保護と観光について。原子力発電所が及ぼす影響について。現代の経済・社会構造とその限界による環境悪化について。湾岸戦争による大気汚染や海洋汚染について。経済の発展と環境破壊について。環境問題に対する企業の責任について。都市の発展と環境破壊について。都市の開発による、都市周辺部の環境の変化について。日本とアメリカの地域構造の比較と開発の段階について。現在の世界の環境破壊の実態について。資源開発と発展途上国について。石油資源について。経済開発による環境破壊について。これまで生産に伴う正の部分しかとらえてこなかった経済学は、生産に伴う負の部分も含めてとらえるとどうなるかについて。南北問題と環境問題について。大国エゴイズムと環境問題について。資本主義経済と環境破壊との関係について。不確定性下の最適開発政策について。持続可能な環境開発について。自然と調和しうる開発を、緻密な計算で予測する。環境破壊と企業の責任について。環境破壊における人的要因について。環境問題における経済学的考察について。環境をめぐる国家間の紛争解決や防止に関する国際環境法について。法的視点からみた環境問題について。

A大学で、環境問題を扱っている諸科目の内容は、実に、多種多様多岐にわたっているといえる。

4. A大学で、上記の、環境問題に関する内容を、授業で学んだことは、どういう点で、役に立ちましたか。（いくつ選んでもよい。）

この質問に対して、回答した者は、272名中、83名、無回答者は、189名である。

知識として役に立ったと答えた者は、83名中、74名で、実践・実行まですすめることができたと答えた者は、12名で、その他において役に立ったと答えた者は、4名である。その他としては、例えば、自分達の世代が将来やる

べきことを考えることに役立った、との回答があった。

A大学で環境問題に関する内容を授業で学んだことは、全体的傾向としては、知識として役に立ったということになる。実践・実行まですすめることができるように、環境問題に関する内容がなるためには、どうすればよいか。ここに、A大学のみならず、一般的に大学における、環境問題の内容に関して、課題のひとつがあるといえる。

5. 大学で（A大学に限らない）、独立した一科目として、「環境学（仮称）」が開講される必要があると思いますか。

開講される必要はないと回答した者は、272名中、25名で、開講される必要があると回答した者は、246名で、無回答者は、1名である。

大多数の学生が、独立した一科目として、「環境学（仮称）」が開講される必要を感じていることが、わかる。（前述したように、A大学では、1992年度から、独立した一科目として、「環境問題」が開講されている。）

6. 開講される必要があると答えた人は、どのような内容が網羅される必要があると思いますか。

回答者246名の内容をまとめると、次のようになる。理論的なことよりも、学生一人一人の生活のなかで、実際にどのようなことができるかやどうすればよいかを知り、それらを実際に体験学習したり、それらを実際に実践・実行することが、大事である。環境問題の原因、現状の把握、解決方法（対策）が網羅される必要がある。地球的規模の環境問題と身近な日常生活的規模の環境問題の両方が網羅される必要がある。個人（市民）レベル、自治体レベル、国家（日本）レベル、国際的レベルで、何ができるが網羅される必要がある。環境問題に対する世界各国の政策や、環境保護と世界各国の利害が網羅される必要がある。環境問題における南北問題が網羅される必要がある。戦争や軍縮や原発と環境問題が網羅される必要がある。環境問題に対するNGOの活動が網羅される必要がある。経済発展や企業と、環境問題が、網羅される必要がある。地球資源残量と代替エネルギーの開発が網羅される必要がある。生態系の破壊が網羅される必要がある。環境破壊が、人間の身体や心理に及ぼす影響について網羅される必要がある。環境問題に関する法律や政策の立案ができる人材を育成するようなカリキュラムであることが、大事である。

上記の内容からいえることは、次のようなことであろう。独立した一科目

としての「環境学(仮称)」の内容(カリキュラム)は、環境問題を、体験学習的に、実践(実行)的に学べるようになってきていること、環境問題の原因・現状の把握、解決方法(対策)が学べるようになってきていること、学問的には、人文科学・社会科学・自然科学を含む学際的・総合的なものであること、レベルとしては、個人(市民)レベル・日常生活レベルから、自治体レベル、国家(日本)レベル、国際的レベル・地球的レベルまで網羅されていること、環境問題に関する法律や政策の立案までできるようになること、というようなことになろう。

このなかで、特に、最後にあげた、環境問題に関する法律や政策の立案ができる人材を育成するようなカリキュラムであることが大事であるとの回答があったことに、注目したい。ここに、大学は、新しい学問である「環境学(仮称)」において、環境問題のスペシャリストの養成をもその責任としてもっていることを、萌芽の形で、みることができるといえよう。

7. A大学は、環境(キャンパス全体)をよくしようと配慮していると感じていますか。

配慮していると感じていると回答した者は、272名中、131名で、配慮していると感じていないと回答した者は、138名で、どちらともいえないと回答した者1名、わからないと回答した者1名、無回答者1名である。

配慮していると感じている回答者と配慮していると感じていない回答者が、ほぼ半半であることは、どう解釈すべきだろうか。(次の問8の回答の内容を考慮に入れると、問7の回答結果の解釈は、A大学の環境への配慮は、ポジティブに受けとめられている、とすることが許されよう。)

8. 配慮していると感じていると答えた人は、どういう点においてか、具体的に書いてください。

回答者131名の内容をまとめると、次のようになる。緑(具体的には、A大学のシンボルである松の木)が多いし、さらに、それを多くしようとしている。キャンパス全体がとにかくきれいである。(具体的には、ごみやタバコの吸殻が落ちていない。特に、トイレがきれいである。キャンパスに、ごみ箱や灰皿が多数置いてある。)清掃に携わる職員が多い。食堂では、禁煙タイムや禁煙スペースがあり、また、燃えるごみと燃えないごみとを分けている。不用(要)になった紙を回収すべく、リサイクルボックスを設置し、再生紙として利用している。構内への車の乗り入れを規制している。図書館

が増築されている。中庭が美しくなっている。(具体的には、芝生や花壇やロータリーや図書館前の広場を指す。)学生がくつろげる憩いの空間を多くしようとしている。身体障害者のために、エレベーターに案内の声が入るようになっていたり、スロープを取り付けている。

回答者は、A大学の環境への配慮を、きわめて正当に評価していることが、上記の内容から、よくわかる。

9. 大学生として (小・中・高校生や社会人とちがって)、どういう点で、環境をよくすることに、貢献できますか。

大学生だからということ貢献できることはないという回答した者は、272名中、111名で、大学生として貢献できると回答した者は、155名で、無回答者6名である。

以上の回答から、小・中・高校生や社会人とちがって、大学生として、特に貢献できると考えている者が多いということが、わかる。

10. 大学生として貢献できると答えた人は、どういう貢献ができるか、具体的に、書いてください。

回答者155名の内容をまとめると、次のようになる。大学生は時間的に余裕があるから、それを活かすことにおいて、貢献できる。回答者が具体的例としてあげたものは、地域活動、リサイクル活動、ボランティア活動、自然保護ツアー(植林ツアー)参加などである。授業において、あるいは、サークル活動において、環境問題について、学習し、さらに、研究し、その学習や研究の結果を、企業や官庁やマスコミや市民などに、発表(公表)し、さらに、行動をおこすべくアピールすることにおいて、貢献できる。サークルをつくり、サークル単位で環境をよくする活動をするということにおいて、貢献できる。大学で、討論会や講演会を開催することにおいて、貢献できる。環境サミットなどのような大きな会議において、大学生だけで構成されるものをつくることにおいて、貢献できる。これからの時代をリードする人間として、大学間で交流することにおいて、貢献できる。大学生はアルバイトをよくするが、アルバイトをする際に、環境をよくするようなアルバイトをすることにおいて、貢献できる。卒業後、仕事において、いかにして環境をよくするために働くことができるかを考えておくことにおいて、貢献できる。

上記の内容のうちで、最も多かったものは、大学生は時間的に余裕があるから、それを活かすことにおいて貢献できるという内容のものであったが、

大学生は、環境問題について、研究し、その結果を、企業や官庁やマスコミや市民などに、発表（公表）することにおいて、貢献ができるという内容があることに、注目したい。ここにも、萌芽としてではあるが、大学生が、自らを、新しい学問である「環境学（仮称）」のスペシャリストでもある必要を感じているということが、看取できると思う。

IV おわりに

大学における環境教育への取組みの、A大学における調査の結果から、次のことが、A大学に限らず、大学における環境教育の今後の課題としてあるといえよう。このことは、大学における環境教育（環境学）への筆者の一提言でもある。

大学における「環境学（仮称）」が、一方において、大学生のニーズである（市民としての大学生のニーズである）、学生一人一人の生活のなかで、実際にどのようなことができるかやどうすればよいかを知り、それらを実際に体験学習したり、それらを実際に実践実行することが大事であることに応えていくとともに、（これは、大学で、独立した一科目として、「環境学（仮称）」が開講される場合、その科目の内容として、最も多くの回答者が、網羅してほしい、と答えたことによる。）他方において、萌芽の形において、調査の結果に出ていたように、大学の「環境学（仮称）」は、環境問題のスペシャリストを養成する責任をもっていることを自覚することが（これは、大学で独立した一科目として「環境学」（仮称）が開講される場合、その科目の内容として、環境問題に関する法律や政策の立案までできるようになるカリキュラムであることと回答した者がいたことや、小・中・高校生や社会人とちがって、大学生は、環境問題について、研究し、その結果を、企業や官庁やマスコミや市民などに、発表（公表）することにおいて、貢献ができることと回答した者がいたことによる。）、最も差し迫った課題であるといえると思う。

以上のことが、最も緊急な課題であると思われるが、その他に、今回の調査の結果としても出ており、また、（既に発言されているもののなかで、）大学における環境教育（環境学）は、人文科学、社会科学、自然科学を含む学際的かつ総合的なものであること、個人（市民）レベル・日常生活レベルから、自治体レベル、国家（日本）レベル、国際的レベル・地球的レベルまで

含むものであることなどが不可欠であることは、いうまでもない。

本小論を閉じるにあたって、キリスト教学Ⅳ（キリスト教倫理）のクラスに積極的に参加して下さった受講生のみなさん、大学における環境教育への取組みについてのアンケートに協力して下さった回答者のみなさん、課題レポートの掲載を快諾して下さった松浦博子さんと斉藤剛さんに、ここに記してお礼を申し上げます。

注

- (1) 講義としては、大貫隆著「被造物の祈り 新約聖書の自然観に寄せて」『聖書と教会』（日本基督教団出版局、1992年1月号、PP.8-13.）を、資料として、用いた。

他に、「救え！ かけがえのない地球 環境戦争が始まる—新しい安全保障—」（NHK、45分間）のビデオをみせた。

レポートとして、次の課題を、出した。⁽²⁾

- (1) 以下のトピックスの中から一つ選んで、
- (2) あなたにもし5時間の時間が与えられるとしたら、
- (3) そのトピックスの問題（課題）の解決のために、どのようなプランをたて、
- (4) どのように実践したかの報告をしてください。

トピックス：環境問題

男女の愛

女性の生き方

生命倫理

分量：レポート用紙（横書き）2枚

試験として、次の問題を、出した。旧約聖書の倫理観や新約聖書の倫理観—イエスの場合やパウロの場合—と、現代社会の具体的な倫理問題との関連において、多くの学生が、環境問題を、とりあげていた。

- (1) 以下の倫理観のなかからひとつを選び、
- (2) その倫理観の（諸）特徴をあげて説明を加え（説明に、聖書の内容を入れること）、
- (3) その（諸）特徴は、現代社会の具体的な倫理問題と、どのように関連付け

ることができるか、叙述しなさい。

倫理観：旧約聖書の倫理観

新約聖書の倫理観

－イエスの場合－

新約聖書の倫理観

－パウロの場合－

(2)多くの優秀なレポートのなかから、環境問題をとりあげた、次の最優秀の二篇のレポートを、紹介する。

環境問題について

松浦博子

地球を守るために何をすればよいのか。私が様々な形で今後実践してゆくためにも、その出発点として、現状を知ろうと思い、より身近な所から、福岡市環境局環境保全部環境管理課を訪問して、話を伺った。

公害問題について。福岡市の場合、北九州市などとは異なり、工場が少ないことから、産業に起因するものより直接私達の生活によるものが多い。九州の中心的機能を高め経済や文化が一極集中して都市化が進み人口も急増している。これらが引き金となり都市生活型公害が発生している。福岡で注目される都市生活型公害には、大気汚染、水質汚濁、騒音の3つがある。1. 大気汚染の主要な原因は、車の排気ガスだ。前述のように、人口増加に伴い、車の所有率が確実に増え続け、排出されるガスが、太陽光線と化学反応をおこすと、光化学オキシダントが発生する。空気中にその密度が高くなれば、目や喉が痛くなったり吐き気がするなどの異常を訴える人が出る。福岡では光化学オキシダント注意報が1990年にはじめてだされた。それは一面では他の都市より公害の進みぐあいが遅かったことを示すとともに、いったん汚染されると、それがいかにはやく進んだかの証明となった。市では自動車公害条項により規制したり常時密度を監視している。2. 水質汚濁については、近年の水不足により注目されたが、この原因として生活廃水の占める割合が高い。私達の廃水は下水処理を受け、博多湾に排出されている。現在下水処理は90%近く整備され(今年度末には98%の予定)、余裕をもって設計され、最新技術も投入されているが、廃水の激増のため現状は横ばい状態である。しかも博多湾は他と比べ閉鎖的で外から潮流が入らず自然浄化能力が低い。結局は台所でいかにとめられるかにかかっている。3. 騒音については、騒音規制法により、地区ごと時間ごとに区分して制限されているが、公害に関する苦情の中ではトップだ。車や事業による騒音は、ある程度は都市開発などの概念の下に解消はみられるが、問題は住宅地での生活上の騒音だ。しかもこれはおもしろいことに、近隣の間人間関係がかなり左右する。現代都市化とともに近所

付き合いが希薄となり、以前では許せた音が今の社会では許せない音になっていたりする。これら3つの公害について、福岡市では市内にいくつもの測定所を設け、環境局の監視センターへいつでも情報が収集されるような体制がとられているが、結局は市民が自分のレベルに置き換え、どのように責任を遂行するかにかかっている。

次にゴミ問題について。ゴミは一般廃棄物と産業廃棄物に分れる。一般廃棄物は夜間回収し、産業廃棄物は各社が個別に処分することになっているが、処理専門の業者に任せるのが普通だ。しかし大半は埋め立てることが多く、そのため処分場の不足という問題を抱えている。このままではあと数年しかもたない。現在市内のゴミを処理するのに約252億円が費されているそうだ。

福岡市では1986年10月に福岡市総合プランを基礎として、福岡市環境プランが作られた。これにはまだ地球規模の概念が入っていないが、不可価値の追求が盛り込まれている。そして、1992年から、補正を加えてこのプランにより、行政・企業・市民が三者一体となって活動が行えるように市民協議会が作られ、6月14日に「環境に優しい都市宣言」が発表された。自然改善に向けて「学び」「ふるまい」「行い(参加)」「つなぐ」の4つの柱をたて、12月には具体的な行動計画が発表される。また、5月11日から14日まで、ロークラブが、地方都市ではコロラドに続いて福岡で開催され、福岡から地球へ行動を広げる方針が示された。さらに環境局から、自然環境シリーズとして冊子が発行され(今まで全5冊)、市民に福岡の自然を紹介するなど、環境保全のため広範囲に地方公共団体が活躍している。

私達にできることはたくさんある。過剰包装やダイレクトメールを断ったり、使わない電気を消したり、空き箱を捨てずに小物入れなどに利用することでさえ、環境保護に繋がるのである。大事なのはそれを持続させることなのだ。改善策は非常に簡単なことであるにもかかわらず、それが地味ですぐにはしかも直接には解決に繋がっているか見えないため、自分と世界との繋がりを見失いがちで、自分の行動を信じて続けることが必ずしも容易ではないが、もう逃げられないのだ。

私は今出エジプト記の一場面を思い起こしている。奴隷という苛酷な生活からモーセに率いられ逃げてきたイスラエル人。モーセが神との対話のためシナイ山に登っている間、不安に怯えている彼らの姿である。彼らは言う「奴隷の方がよかった」と。また誰かは言う「モーセは帰らない。エジプトの神に従い歌え騒げ」と。私達の今の姿はこの人々と似てはいないだろうか。「自然はいい」「田舎はいい」と言うが、都市化してしまった人間はもうそこでは生きてゆけないし、不便な生活より便利に快適にと自然を壊してきたのも私達なのだ。かといってこのままやりたい放題の開発を行えば、それによって自らの首を絞めることになる。自然をなつかしむことはよい。しかしそれを逃げ道に利用してはならない。現状に背を向けず自ら都市が抱える問題に直面しなければならない。モーセが言い残し

たことは決して難しいことではなく、神を信じることだった。今、私達も自らの選択により、自分のできることを実践し、それが地球を救うことに繋がると信じ、明日を切り開いてゆかねばならない。地球を殺すのも人間なら、生かすのも人間なのだ。

このレポートには、福岡市環境局が出した、『FUKUOKA 福岡市環境プランのあらまし』、『ふくおかのみどり（自然環境シリーズI）』、『わたしたちのまちの環境』、『清掃ハンドブック』、『福岡市の環境のあらまし』、『The Club of Rome Conference in Fukuoka, Kyushu by Secretariat of the Executive Committee』、さらに、福岡市が出した、『環境にやさしい都市をめざす福岡市民の宣言』が、添付されていた。

環境問題—我々ができること—
はじめに

齊藤 剛

5月にローマクラブ福岡会議、6月には地球サミットが開催され、世界中で環境に対する意識が高まったが、これを一時的なブームとして終わらせてはならない。特に我が国ではその傾向が顕著であり、また、サミットでの首相の失態に象徴されるように、環境に対する人々の意識が低い。便利さ快適さばかりを追求し、自然保護・環境保護などの言葉に対して、大半の人が「なんだか面倒くさそう」と拒絶反応を示してきた。しかしそのような呑気なことをいっては行けないということは、良識のある人ならずで感じているはずである。ただ普段の忙しさのためか、見て見ぬふりをしているのだろう。私もそのうちの一人であった。だが実は、環境問題というものは、いつもいつも大々的な運動をしなければいけないわけではなく、むしろ一人ひとりの意識改革があれば十分に効果があがるし、逆にそれがなければ解決への道はひらけないものだというを、私はいくつかの実践を通して実感できた。

今、最も深刻な環境問題のうち、水（水資源の汚染と無駄遣い）とゴミ（ゴミによる土壌汚染）については、我々が市民レベルで直接接点を持ち、責任を負っている。そこでこの「水」と「ゴミ」という身近で深刻な問題をテーマにし、誰にでも簡単に取り組み、実践できる方法を、5時間という枠の中で（しかしあまりそれにとらわれずに）実践してみた。（《 》内の時間は、その項目に費したおおよその時間である。）

1 「水」水は有限で貴重な資源である。その水を、人々は毎日当たり前のように使用し、排水している。一人ひとりが自覚しなければ「水のない街・泳げない海」は現実となりうる。簡単にできる「水環境」を守るための実践と結果を、以

下に挙げてみる。

- ① 水洗トイレ《10分》…タンクの中に物を入れれば、その容積分節水できるので、やってみた。2ℓ入りのペットボトルに水を入れ、中に沈めておく。これで、1日大レバー2回分として4ℓ、年間で1,460ℓの節水になる。
 - ② 歯みがき《15分》…今まで、水を出したままやっていた。1回1分として計量してみたら、何と5,000ccの水を流していた。実際にはコップ2杯(400cc)で済むはずだから、1日3回として、 $15ℓ - 1.2ℓ = 13.8ℓ$ の無駄、年間で5,037ℓの無駄である。1.5ℓ入りボトルの3,358本分である。この件だけでも、いかに自分が水に対して無頓着であったか明らかになり、血の気が引く思いがした。以後必ずコップを使用している。
 - ③ 風呂《10分》…家庭の中で最も水を使うといわれる風呂。一人暮らしということもあり、以前から水のほりかえは数日に一回を実行している。そこで今回は、この風呂水を洗濯に使ってみた。少し抵抗があったが、1回で数十ℓの節水になる。できる限り続けようと思う。
 - ④ 洗濯《40分》…風呂水の利用の他に、ため濯ぎが有効というので、やってみた。注水濯ぎと比べ、1回で50ℓも節水できるらしいが、泡ぎれが悪く(洗剤の使い過ぎ?)、手間もかかった。
 - ⑤ 排水《15分》…「ここは海の入口です」というCMコピーが示すように、台所の排水は、海や河に戻される。もちろん下水処理はされるが、異物を流せば設備の寿命を縮め、海洋汚染につながる。そこで台所の排水口に目の細かい網をつけてみたら、5日目ですべて詰まり、水が流れなくなった。今までそれだけのゴミを流していたことになる。以後この網は継続してつけている。
- II「ゴミ」福岡市のゴミ処理能力は、既に限界すれすれに達しているといわれ、ますます増加する量に対し、残る手段は市民の意識改革しかないといわれている。ゴミの日に、山と積まれたゴミの山を見て、確かにそうだと思った。
- ① 広告《15分》…新聞の折込み広告で、裏が白いものをためることにした。一週間統計をとったら、B4サイズにして約17枚集まった。一日2枚として、年間で700枚になる。メモ用紙用に1/4にすれば2,800枚にもなる。毎朝楽しみにして探すようになってしまった。
 - ② 古新聞《90分》…新聞紙は、再利用すればエネルギー30%の節約ができ、酸性雨や温暖化のもとになるCO₂発生を防ぎ、なにより木の乱伐を防げる。そこで一年分近くたまっていた古新聞を束ねたら、高さ30cmの束が9個もできた。他に、企業からの就職用資料やDMも、段ボール箱に6箱分以上あるので、一緒に、子供会の廃品回収(次回は8月2日)に出す予定である。
 - ③ 買物袋《60分》…ちょっとした買物にも必ず使用される買物用ポリ袋。ゴミの中でもかなりの量を占めているのだが、現在、大手スーパーを中心に「買物袋持参運動」というのが少しずつ広まっているらしい。そこで特に力をいれて

いるサニー（藤崎店）に出かけてみた。レジで買物袋を断ると「5円券」がもたらえた。ポリ袋が約5円かかるかららしい。サニーでは他にも「ノートレイ運動」や、アルミ缶の回収も行ってた。アルミ缶を持参して入口の箱に入れておけばリサイクルされ、95%の電力が節約され、さらに代金は全額WWF（世界自然保護基金）に寄付されるという。他にも、ダイエー（原店）や、F・COOP（原店）でも同様の運動をしていた。

- ④ ゴミの量《45分》…リサイクルよりもっと重要なのは、基本的にゴミを出さないことである。ここでまた、2週間かけて統計をとってみた。まず一週間目、これまで通り生活をして、可燃物のゴミの量は45ℓ袋3コ分強だった。次の週、こんどはなるべくゴミになるものを持ち込まず、コンビニエンスストアの利用をやめ、買物はサニーかダイエーで済ませ、ポリ袋を持ち帰らなかった。すると、45ℓ袋1コちょっとですんだのだ。意識的にやったとはいえ、やればできるものである。

おわりに

環境問題のため、地球のために5時間でできること、それは意識改革だ！ということで、身近なことに取り組んでみた。その結果、わかったことは、環境を語るなら、身の回りの小さなことに目を向け、そこから出発することが重要だと思った。節水とゴミ減量は今後も続け、また、今回できなかったことにも積極的に参加し、まわりの人にも呼びかけたいと思う。

参考文献『地球節約術大全』第三書館

福岡市水道局及び環境局の資料

(3) 科目の順序は、A大学の学則に出ている科目の順序に従った。

(1992. 10. 31)